

教科書における志賀直哉作品にみる国民像

－『小僧の神様』を中心として－

久保田 治 助〔鹿児島大学教育学部（地域社会教育）〕・木 村 陽 子〔埼玉東萌短期大学〕

The national image "a boy's God" which is the Naoya Shiga work in a textbook

KUBOTA Harusuke・KIMURA Yoko

キーワード：国語科教育、国定教科書、志賀直哉

1

周知のとおり、志賀直哉作「小僧の神様」（『白樺』1920／大正9年1月）は戦後の定番教材として数多くの中学校国語教科書に収録されてきた。試みに1946年から1986年の期間に中学校国語教科書の「読書のとびき」「読書案内」で推奨されてきた近現代日本文学の作家および文学教材の上位20位を挙げると、以下の表のようになる¹。

〔表1〕中学校国語教科書が最も推奨した近現代日本人作家

順位	作家名（ ）内 は掲載教科書数	順位	作家名（ ）内 は掲載教科書数
1	芥川龍之介（72冊）	11	井上 靖（29冊）
2	志賀 直哉（52冊）	12	国木田独歩（28冊）
3	森 鴎外（48冊）	13	川端 康成（27冊）
4	有島 武郎（43冊）	13	壺井 栄（27冊）
5	夏目 漱石（41冊）	15	菊池 寛（25冊）
6	島崎 藤村（39冊）	16	太宰 治（24冊）
7	宮沢 賢治（37冊）	17	下村 湖人（20冊）
8	山本 有三（35冊）	18	武者小路実篤（19冊）
9	井伏 鱒二（32冊）	19	伊藤左千夫（18冊）
9	木下 順二（32冊）	20	黒島 伝治（12冊）

〔表2〕中学校国語教科書が最も推奨した近現代日本文学作品

順位	作家名（ ）内 は掲載教科書数	順位	作家名（ ）内 は掲載教科書数
1	杜子春（22冊）	10	生れ出づる悩み（16冊）
2	路傍の石（21冊）	12	夕鶴（15冊）
3	小僧の神様（19冊）	13	小きき者へ（14冊）
4	高瀬舟（18冊）	14	鼻（13冊）
4	坊っちゃん（18冊）	14	風の又三郎（13冊）
4	次郎物語（18冊）	16	蜘蛛の糸（12冊）
4	野菊の墓（18冊）	16	吾輩は猫である（12冊）
8	伊豆の踊子（17冊）	16	銀河鉄道の夜（12冊）
9	二十四の瞳（17冊）	16	走れメロス（12冊）
10	山椒大夫（16冊）	20	山椒魚ほか3作（11冊）

表にも見るように、志賀直哉は作家ランキングの第2位、「小僧の神様」は作品ランキングの第3位であり、順位からも戦後の国語教育の中でそれほど大きな影響力を保持してきたかがわかるだろう。しかし、そもそもなぜ「小僧の神様」がそれほど多くの戦後の国語教科書から採択されたのだろうか。その理由を確かめるために、一例として大日本図書出版刊行『私たちの国語 第3学年用』（1961年検定通過、1962－64年使用）の学習指導書の中で言及されていた採択理由を見てみたい。

日本の現代文学といえば最も偉大な足跡を残した作家のひとりとして、志賀直哉をあげないわけにはいかない。その文章の簡潔さ、格調の正しさはすでに定評があるが、中学生にも理解できる小説として、志賀直哉のものというところ、
「清兵衛とひょうたん」「小僧の神様」などがある。他の作品に入る足がかりとして、ここで詳しく「小僧の神様」を読み、理解して鑑賞の基礎を作り上げてゆきたいと思うのである。

つまり、「なぜ志賀直哉なのか」といえば、彼が「日本の現代文学」で「最も偉大な」「作家のひとり」だからであり、また、「なぜ『小僧の神様』なのか」といえば、彼の「文章の簡潔さ、格調の正しさ」を存分に味わうには読み手にそれ相応の成熟度が求められるが、中学生でも理解できそうな平易な小説は「清兵衛とひょうたん」か「小僧の神様」くらいだからだと言うのだ。志賀直哉を日本の現代文学の「最も偉大な」作家と評価するかどうかは各人異論もあるだろうが、しかし、そのこと以上に注意を喚起したいのが同じ指

導書の中で「指導上の留意点」として書かれている以下の記述である。

上の志賀直哉の写真を見せて、その顔が第一級人物の顔であることを気づかせ、前の教材で、かれのおい立ちや作品について調べた際、若いころからスポーツで鍛えた身体が七十歳の半ばになるかれが、歳を感じさせぬ若々しさであることなどを調べたであろうから、そのことを思い起こさせる。

ここでは志賀が作家として「第一級人物」であることの根拠として彼の「顔」が挙げられ、そのことを生徒たちに「気づかせ」よと「指導」されているのである。ここまでくると、もはや信仰にも近いように思われるが、実際、敗戦以前の志賀直哉は今日から想像する以上に党派・階級・思想を超えて人々から広く尊敬された作家だった。そうした言論界の志賀賛美の傾向を、中村光夫は「志賀直哉論」（『文学』1953年1-12月連載）の冒頭部で次のように言及している。

大正期の作家のうち、志賀直哉ほど生きた影響を深く現代文学に与えている人はいません。鴎外、漱石といえどもこの点では到底彼には及ばないのです。武田麟太郎が「志賀直哉は日本文学の故郷」と云ったのは戦前のことですが、たんに武田だけでなく、丹羽文雄のようにやはり仕事の性格から見れば直哉の対極をなすと思われる作家も、「先輩作家から受けた影響といえば、やはり志賀直哉だ。志賀直哉の影響は、文体とかなんとかいうことではなくて、いわば小説を書く態度の問題だった。」と最近の『文学』誌上で、おそらくおおくの人々に意外の感を与える言葉を吐いています。小林秀雄の作家論の処女作が志賀直哉にたいする熱烈な賛辞であったのはひろく知られていますし、川端康成も彼にはときどき反発しながら、その文章には一貫した敬意を払っています。横光利一の生涯も、片岡良一の言葉をかりれば、「リアリズムの道が志賀直哉氏で極まったという考え方の生んだ悲劇」でした。

実は、中村自体は本論の中で徹底して志賀直哉批判を行っているのだが、いずれにせよ、そのような昭和前期に極まった志賀賛美の価値認識がそのまま戦後の国語教科書にも引き継がれるとともに、彼の代表作であり比較的平易な文章だと見なされた「小僧の神様」が、戦後の定番教材として長く君臨することになったのである。

2

さて、上述したような経緯から中学校の国語教科書に多く掲載されてきた「小僧の神様」だが、果してそれほどに〈平易な小説〉であったのか、というのが本論の問題提起である。たしかに、主人公が生徒たちと同年齢であることや簡潔な文章のために、一見平易な文章のような印象を与えるが、後述するように実際に授業で教えるとなると、少なくとも中学生の教材としては、やや難易度が高すぎると言わざるを得ない。たとえば、ある生徒が教員に「先生、鮎屋の主はなぜ小僧に海苔巻を作ってあげなかったんですか?」、「この人は意地悪な人なんですか?」と質問したとしよう。教育現場では、このような素朴な疑問を生徒からしばしば投げかけられるが、このとき教員は生徒にどのように答えればよいだろうか。

しかし、意外なことに、このような作品読解上、当然予想されるような質問に対して、前述した本作を掲載した19種の国語教科書の指導書では、なんら回答例が言及されていない。そればかりか、そのヒントになるような助言さえ一つも書かれていないのである。これはいったいなぜなのだろうか。実は、〈鮎屋の主はなぜ小僧に海苔巻を食べさせてやらなかったのか?〉というこの問いの答えにあたる言及が、小説内のどこにも言及されていないのである。これでは教員も答えに窮してしまうに違いない。

このような教室で生じ得る教員側の困難を想定して、指導上のヒントとなるような助言を与えることが学習指導書の本来の目的であるはずだが、管見のかぎりでは上述した問いに対して言及している指導書は一つもなかった。ところが、複数の指導書を眺めると、その代わりであるのか、多くの指導書では本作を平易に教えられるような

〈ある工夫〉が施されているのである。それはなにか。教員が授業で扱う際に、〈貴族院議員Aと小僧の仙吉の心理の対比〉という枠組みからできるかぎり外れないよう、指導書が巧みに誘導しているのである。

たとえば、二葉株式会社刊行の『中学国語総合二年上』（1954年検定通過、1955年使用）では、「小僧の神様」の「指導目標」として次の3点が挙げられている。

- 〔1〕この話は、どこがおもしろいのか、どう考えたらいいかということ。
- 〔2〕作中人物の心理の描写ということについて、前に学んだ四編と関連して考えをまとめさせる。
- 〔3〕この作品の微妙な、そして、正確な心理の描写と解釈のおもしろさというものを、作中人物の心の動きかたを読みとることによって感得させる。

その一方で、本指導書の「取扱」と「大意」の項には次のような記載がある。

取扱：この作品の高い文学史的 position は、ただちに生徒の理解するところとはならないであろう。しかし、すなおに読み味わってゆけば、ここに登場する二人の主要登場人物の、心理の微妙なうごきはわかるであろう。（中略）おもしろい作品、そして、何か奥行きのある作品だという印象を生徒に持たしめうれば、一応の成功であるというべきであろう。（中略）

大意：うまいすしを食いたいと思っていた仙吉が、ある偶然なことから、Aという貴族院議員にすしを腹いっぱいごちそうになる。そこに至るまで、およびその後のAと仙吉の動きを描写し、Aの知識階級特有の心理と仙吉の庶民のこどもらしい心理を対比、分析してみせている。

つまり、前掲〔3〕では「作中人物の心の動きかたを読みとる」ことが目標に掲げられていなが

ら、実際には〈貴族院議員Aと小僧の仙吉の心理の対比〉以外には論点が拡大しないように指導書が制限を設けているのである。多くの小・中・高等学校では授業で扱った教材の中から中間・期末試験が出題されるが、前述したような〈鮎屋の主はなぜ小僧に海苔巻を食べさせてやらなかったのか？〉という設問は、本文中に主の心理を推測させるに足る直接的な記述がないため、本来は作品読解上の重要な問いであるにもかかわらず、生徒たちに理解を問うことができないのである。ところが、設問の範囲を〈貴族院議員Aと小僧仙吉の心理の対比〉だけに限定するのであれば、本作の難易度は格段に下がる。つまり、本来は中学生の国語教材としてはやや難易度の高い「小僧の神様」という作品に、こうした制限を設けて〈中学生にも理解可能な教材〉へと仕立て直したことによって、本作は中学生の国語教材として長く使用されてきたのである。

3

かつて志賀直哉が彼の賛美者たちから「小説の神様」の愛称で呼ばれていたことはよく知られているが、そのように彼の代表作と見なされている「小僧の神様」という作品は、具体的にどのような点が優れていたのだろうか。答え方には幾通りもあると思うが、本論はそれが、登場人物たちの認識の微妙なズレを本作が鮮やかに切り取り、描出して見せている点にあると考える。たとえばそれは、海苔巻を食べたがる仙吉に対する〈鮎屋の主〉と〈貴族院議員A〉の捉え方のズレであったり、屋台鮎の体験を決行した〈貴族院議員B〉と〈貴族院議員A〉との感想のズレであったり、あるいはAが仙吉にした「鮎をおごる」という行為に対する〈鮎屋のかみさん〉と〈貴族院議員A〉自身の認識のズレであったり、と、そうした登場人物間の微妙な心理のズレを読み味わうところに本作の難解さも、おもしろさもあると言ってよいだろう。

ところが、そのような認識のズレが生じてしまうことの背景や理由について、小説内では直接的に言及されている箇所が極めて少ない。それもまた、無駄な描写を一切省いた簡潔さで知られる志

賀の文章の魅力なのだろうが、試験による成績評価を前提とする国語科授業の教材として考えると、やはり〈教師泣かせ〉と言わざるを得ない。志賀は、同時代読者であれば当然に察しがつくようなことを、くどくどしく解説するような文章を何より嫌った。そのため、この小説には、読者の側にそれ相応の知識がなければ登場人物たちの心理を類推しにくい要素が多分に含まれている。その意味でも、本作はテキスト論的アプローチ²が前提となる小・中・高校の国語科教材としては不向きであると言わざるを得ない。

具体的に考察していこう。本作を読むうえで念頭に置いておきたいのは、作品内の時間が本作を志賀が構想・執筆した実時間と、ほぼリアルタイムであるという点である。一例を挙げると、第7章でAが流しの辻自動車を止めて帰宅する場面が描かれているが、日本で最初にタクシー会社が設立されたのは1912（大正1）年である。しかも、1912年時点での自動車の総数はまだ日本全国で2980台しかなかった。1921年（「小僧の神様」発表の翌年）でも自動車の総数は4000台前後にとどまっていることから³、〈Aが流しの辻自動車を止めて帰宅する〉という行為自体が、同時代読者からは最先端の都市文化として受け止められたに違いない。そのことを前提としたうえで、以下、海苔巻を食べたいと欲する仙吉に対する〈鮎屋の主〉と〈貴族院議員A〉の捉え方のズレについて論証していきたい。

まず確認しておきたいのは、本作が構想・執筆された時代（1919／大正8年12月執筆）における〈鮎屋の主〉と〈貴族院議員A〉との階級上の圧倒的な格差である。両者の場合、同じ日本人ということ以外にほとんど共通項がないといっても過言ではないほど、互いに価値観の異なる共同体に属した者同士だった

そもそも貴族院議員とはどのような人たちだったのか。1889（明治22）年に発令された貴族院令によれば、皇族議員（満18歳以上のすべての皇族男子、終身、定員なし）、華族議員（満25歳以上のすべての公爵・侯爵と、同じく満25歳以上の伯・子・男爵の中で選ばれた者、任期は7年）、勅撰議員（天皇の任命で選ばれた国家への功勞

者、学識者、終身）、多額納税者議員（任期は7年、選ばれた者66人以内）から貴族院議員は構成されていた。1920（大正9）年時点での爵位別人数は、伯爵18人（全体の17%）、子爵66人（17%）、男爵66人（16%）だった⁴。Aの場合、「若い貴族院議員」とあるので勅撰議員や多額納税者議員だった可能性は低く、とはいえ屋台の鮎屋に一人で出かけるくらいには自由があったことから皇族であったとも思われず、Aは華族議員であった可能性が高い。また爵位は華族の戸主のみに与えられていたので、Aは早くに父親に死なれたか、父親が隠居して家督を相続した20代後半から30代前半くらいの嫡子だったと考えられる。だとすれば、歳若くして爵位を継ぎ、しかも互選制である貴族院議員に選ばれているAは、相当に恵まれた条件の男だったといえるだろう。

また、AやBを20代後半から30代前半くらいの年齢と考えるならば、彼らは謳歌主義全盛時代に生まれ、東京の景観が〈江戸の町並み〉から〈モダン都市東京〉へと移り変わる契機となった市区改正（1888／明治21年「東京市区改正条例」勅令、1910／明治43年第1期事業終了）のただなかに学生時代を過ごした世代だ。しかも、華族の子弟は通常22歳まで英国の貴族学校を模した学習院初等科・中等科に学ぶ義務があり、成人後も華族会館等の施設で欧米人に伍する教養を体得する責任を負っていた。

留意したいのは、当時の学習院初等科というのは満6歳から14歳までの8年生までであったという点である。当時の学習院の学制を見ると、男女ともに小学科は満6歳から14歳までの8年制、男子中学科は15歳から22歳までの8年制であった⁵。小説では貴族院議員Aの目を通して小僧仙吉の年齢が「十三四の小僧」と推測されているが、重要であるのは、当時の貴族社会の価値観では「十三四」はまだ〈小学生〉（7－8年生）であり、Aの目に仙吉は、働かせるに忍びない〈いたいけな子ども〉と映っていたという点である。

他方、〈鮎屋の主〉の場合はどうだっただろう。日本の公立小学校は1900（明治33）年、小学簡易科（3年制）を廃止、義務教育を4年生に統一し、さらに1907（明治40）年、小学校令を改正

して尋常小学校の義務教育が4年から6年へと引き上げられた⁶。つまり、近代がはじまってから40年間も、日本では10歳前後の児童の就労を法律的に認めていたのだ。

「小僧の神様」が書かれた当時、児童労働の禁止は先進国ではほとんど常識となっていたが、肝心の児童の定義にかかわる義務教育の年限や労働者の最低年齢については、国や階級によって一定ではなかった。特に日本の場合、1911（明治44）年公布、大正5年に施行された「工場法」では、平民の義務教育年限に対応させて、満12歳未満の児童の就労を禁止していたが、1919（大正8）年10月に開催された第1回ILO（国際労働機関、1919年創設）総会では、「工業ニ使用シ得ル児童ノ最低年齢ヲ定ムル条約」（第5号条約）が採択され、公私の工業的企業においては14歳未満の児童を使用することができないことが確認された。ただし、日本はこのとき世界基準の14歳案を採択しつつも、同時に「義務教育終了者は14歳未満をも同等と為す事」を主張しており、ある意味、玉虫色の解決を図ったと言えるだろう⁷。

このように、当時の日本では児童の定義が貴族（世界基準：14歳）と平民（日本基準：12歳）とで異なるというダブル・スタンダードが取られていた。つまり、〈貴族院議員A〉の目には「十三四の小僧」は小学生（児童）と映ったのに対して、〈鮎屋の主〉の場合、暖簾分けしてもらっている年齢ということを考えて主の年齢を30歳前後以上と仮定すると、彼は平民学校の義務教育がまだ3－4年間だった時代に小学校を出た世代であり、その主の目に「十三四の小僧」は立派な年少労働者と映ただろう。

重要なのは、当時の江戸の商家のしきたりでは、丁稚の買い食いは奉公人の墮落のはじまりとして厳しく咎められていたということである。たとえば、1879（明治12）年4月23日「読売新聞」（朝刊1頁）には次のような記事がある。

両国若松町の両替屋山敷孫兵衛の店の小僧末三郎は四年前より雇はれて始めのうちは実体に勤めたが追々買喰いから功が経て湯の帰りに牛鍋で一杯とか使の出先で鰻飯とまでなったので

店の金を持ち出し夫が頭はれて去年中お拂い箱となった（後略）

当時、年若い小僧たちは小遣いを所持していなかった。そのため仙吉も少額ずつとはいえ、遣いを頼まれる際に店から与えられる往復の電車賃の片道分をくすね、歩いて帰するという方法で鮎代を貯めたのである。この〈くすねる〉という行為を、指導書や先行論では、まるで〈節約〉のように安易に捉えがちだが、前掲新聞記事にも見るように、仙吉の所行はちょっとした不良行為として捉えるべきものである。

つまり、鮎屋の主が小僧に海苔巻を作ってあげなかった理由もそこにあったのだ。屋台とはいえ彼は一つの暖簾を掲げる立派な店主であり、主もまた江戸的価値観の持ち主にほかならなかった。他方、先進諸国のブルジョア階級と価値観を共有する貴族院議員Aには、仙吉の不良行為をピシヤリとたしなめた鮎屋の主の教育的行為の意味がまったく理解できなかった。主の小僧への仕打ちを「可哀そうだった」としか認識できない〈貴族院議員A〉は、主や小僧とは別の価値観の共同体に属する〈異質な他者〉であったのである。

4

ところで、「小僧の神様」の舞台として選ばれている「神田」とは、当時どのような区域だったのだろうか。神田は江戸の代名詞のような町であり、江戸時代の庶民たちは正月になると神田明神に参詣した。つまり、神田は江戸っ子たちの「神様」が住まいする特別な土地だった。その神田区の西隣には代官町や皇城（宮城）や旧本丸があった。また、北西方向は小石川町と隣接していたが、小石川には約10万坪にも及ぶ東京砲兵工廠があった。ここは1907（明治40）年時点で14000人を超える下層労働者が働いていた東京市内最大の工場群だった。つまり、神田は皇族・華族・士族が多く邸宅を構えた麹町と、下層労働者たちが群居する小石川のあいだに挟まれた区域だったのである。前述したように、「小僧の神様」という作品は〈貴族社会〉と〈庶民社会〉という二つの価値観共同体のあいだの認識のズレを、これでも

か、これでもかと畳み掛けるように読者に突きつけてくる、そこに最大のおもしろさがあると本論では捉えているが、「神田」という舞台設定は、ダブル・スタンダードのはざまに揺れる世界として格好の場だったと言えるだろう。

その神田は、現在でも江戸前寿司や蕎麦屋など江戸的光景を多く残した地域だが、大正時代であればなおさらのこと、江戸的町並みや江戸っ子気質の下町おやじなどが其処此処に見られたに違いない。たとえば小説の冒頭は、仙吉の奉公する神田の秤屋の光景からはじまるが、紺のはげ落ちた暖簾の先には、帳場格子の中で巻煙草をふかす番頭たちや前掛の下に両手を隠し入れて正座している小僧がいるような江戸の光景が広がっていた。二人の番頭の会話も、実に江戸っ子的だ。

これに対して、第三章以降、若い貴族院議員のAとBが登場する。彼らは子どもを幼稚園に通わせその子に体量秤をプレゼントしたり、辻自動車と呼び止めて乗車したり、Y夫人の音楽会に出かけたり、といった別世界の生活を送っている。

ここで改めて問いたいのは、仙吉の勤め先は米屋でも呉服屋でもなく、なぜ「秤屋」として設定されていたのか、という問題である。留意したいのは、当時、疫病の頻発によって人々は〈体重を量る〉という行為に多大な興味を示したという点である。大正3年にはペストとチフス、大正4年にはペストやジフテリア、大正5-6年と8年にはコレラ、大正7-8年には流行感冒（インフルエンザ）と、大正時代の前半にはさまざまな疫病が流行し猛威をふるった。1919（大正8）年11月6日の「東京朝日新聞」によれば、1年間の罹患者は40万人、死者は11月6日時点で1万2200人を超えていたという。また、『近代日本総合年表』（岩波書店、1989年）によれば、1918（大正7）年の日本全体での1歳未満の乳児の死亡率は18.9%、東京府の乳児死亡率は18.8%だったという。このことは志賀直哉にも無関係ではなく、彼は1916（大正5）年に生後間もない長女を亡くしたのに続き、1919（大正8）年7月（「小僧の神様」執筆の5か月前）には生後37日で長男を丹毒で亡くしている。

こうした乳幼児の死亡率の増加は、健康な赤子

やそれを産んだ母親に対する世間の憧憬の念を高めずにはおかなかった。とりわけ新聞で連日のように取り上げられたのが、1915（大正4）年12月2日に生まれ、当時、健康優良児の象徴のように仰がれた澄宮（後の三笠宮）の存在だった。そして、その澄宮の健康の証とされたのが宮の体重の重さだった。1915（大正4）年12月4日の「朝日新聞」（朝刊5頁）によれば、通常の生まれたばかりの赤子の体重が700~800匁（2625~3000g）であるのに対して宮の体重は930匁（3487.5g）もあったという。次第に中上流婦人たちのあいだに、我が子の健康の尺度としての体重への関心が広がっていった。

一方、当時神田には大きな秤屋がいくつもあった。そのため幼い我が子の健康を案じるAが細君や子どもを喜ばせてやろうと、流行の体量秤を買うために神田の地を訪れたとしてもあまり違和感のない設定だった。しかし、これが仮に呉服屋や米屋だったとしたらどうだろう。Aクラスの貴族ともなれば、まず神田のような下町の呉服屋に自ら出向いて服を仕立てることはなかっただろうし、ましてや米屋に買いつけに行くことなどあり得なかっただろう。神田という土地を舞台として選ぶ場合、しかも偶然仙吉とAが再会してもおかしくない店の設定ということになると、当時で言えば、「秤屋」は設定として妥当だったと考えられる。

そこで問題になるのは、なぜAやBのような本来下町文化とは無縁な貴族議員たちが、座敷の鮎屋であるならまだしも、「立ち食い」「手掴み」の屋台鮎などの話題に夢中になっていたのかということである。そもそもAがなぜ屋台鮎体験を決行したのかといえば、「同じ議院仲間のBから、鮎の趣味は握るそばから、手掴みで食ふ屋台の鮎でなければ解らないと云うような通を頻りに説かれた」からだと言うが、「立ち食い」「手掴み」の屋台鮎屋が彼らの身分にふさわしくないことは言うまでもない。

実は当時、ちょっとした江戸趣味ブームが起こっていたのである。「江戸趣味」という名を冠した雑誌が、一つは江戸趣味会、もう一つは趣味の会というところから刊行されていたが、それら

の主たる読者層は中上流階級の知識人階層だった。留意したいのは、「江戸文化」というものが、大正初年ごろには多くの者たちにとって〈懐古〉ではなく〈研究〉の対象となっていたという点である。とりわけ欧米流の教育を受けて育ったAやBの目には、いまだ江戸文化との連続性を保持する下町庶民の風俗や美意識は、欧米文化以上に自身らとの断絶を感じさせるものだっただろう。それゆえになおさら、「江戸文化」は彼らにとって好奇の対象となったのである。

たとえば1930（昭和5）年に刊行された永瀬牙之輔著『すし通』（四六書院）には次のような記述がある。

名のある鮓屋のおやぢの多くは「いっこく」者である。江戸前の鮓屋と江戸児の客には金銭以外に意気の取引がある。おやぢが握ってぼんと置くと、客はちょっとつまんでぼんと口へ放り込む。ぼんと置く、またぼんと口へ。この気合が客にとって大切なのである。主人の気性と客の気性と一脈通づるところがなければならぬ。

これに類した情報を、おそらく彼らも入手していたはずである。西洋流の給仕の作法を常識とする者たちにとっては、金銭を払って店主の機嫌をとり、そのうえ恥をかかされたのではたまらないと感じられたに違いない。しかし、好奇の勝ったBは、庶民の作法であるという「通」の入念な「研究」の後に、「鮓の趣味」の極意とされる「屋台」体験を敢行したのである。そして、そのBから体験談とともに、いっぱしの「通」を説いて聞かされたAにも好奇心が伝染し、今度はAが「屋台の鮓屋」への潜入を決行したのである。

しかし、いざ屋台の前まで行くと、「其処には三人ばかり客が立つて居た。彼は一寸躊躇した」とある。ここでのAの「躊躇」について、たとえばD文学研究会著『志賀直哉—自然と日常を描いた小説家』（星雲社、2005年）では、「Aの〈躊躇〉には貴族院議員としてのプライドの念が働いていたのではないか。庶民の先客三人と同等な立場に立って鮓を食うことは何か自分でもよく意識

できない抵抗が潜んでいたように思える」と解している。

これに対して、山口直孝は次のように論じている。

屋台の鮓屋は、彼にとって未知の場所であり、気軽に利用することは困難であったと思われる。常連客の間に直ちに入って行けないAは、この場で、まだ異質な存在である。仙吉が現れたのは、正にこの瞬間であった。「通」らしさを装い、却って素人であることを露呈してしまった仙吉の姿は、この時点のAにとって必ずしも他人事ではなかったろう。結果的に仙吉の行動は、Aが犯したかもしれない失敗を先取りして示す役割を果たしていた。⁸

しかし、〈お忍びの殿様〉であるAにとって、社交界での衆人環視の中で面子をつぶされたのならいざ知らず、屋台の鮓屋で多少のヘマをして庶民の失笑を買うことにそれほど深刻な痛手があったとは思われない。江戸庶民の美意識である「通」を装うこと自体が、Aにとっては、所詮は〈戯れ〉にすぎない。所持金が足りずに屋台を追い払われた（少なくともAの目にはそのように映った）仙吉の失態とは、土台深刻さが違う。無論、初体験であるための多少の気後れはあっただろうが、Aの場合、すでにBによるリサーチ済みの店を訪ねている点でまったくの未知の場所だったとも言い難く、それほど過度の不安を抱いて京橋に赴いたとは思えない。

しかし一方で、Aの「躊躇」の理由が「貴族院議員としてのプライド」（D文学研究会）からくる抵抗感だったとも考えにくい。屋台行きの決行に際して、おそらくAは多少の「身をやつす」等の工夫をしようとし、庶民の中に紛れおおせることは彼の本意でもあったはずだ。むしろ、Aを屋台の前に一瞬たじろがせたのは、当初彼が思い描いていた江戸の町筋にでもタイムスリップしたかのような屋台を取り巻く光景と、実際の光景とのあいだにギャップがあったからではないだろうか。Aの予想に反して、そこ（神田）は貧民街にも隣接した下層民も出入りする屋台であり、し

かも入店後のAが見たのは「粹」や「通」の遣り取りではなく、金銭がものをいう世界だった。少なくともAは、小僧に対する鮓屋の主の仕打ちをそのように解した。だとすれば、富裕なAが、先行論に指摘されるような過剰な引け目を感じる理由はない。実際、Aは小僧の失態に多少の同情はしたが、主人の仕打ちに取り立てて義憤を感じた様子でもなく、予定どおり常連客の挙動を観察した後、自身も「立ち食い」「手掴み」を実行し、屋台の鮓を堪能してから店を出ている。

5

以上、ここまで「小僧の神様」を〈ダブル・スタンダード〉という観点から分析してきた。前述したように、「小僧の神様」を中学生の国語科教材として扱う際、各種指導書では〈貴族院議員Aと小僧仙吉の心理の対比〉という枠組みから外れないよう注意を促すなど、それなりの工夫が取られてきたが、しかし、ここまで論じてきたような〈同時代的視点〉をまったく排除して本作を読んだのでは、時代を鮮やかに切り取って見せた「小僧の神様」の見事さを生徒たちに伝えることは難しい。本節では多くの指導書で取り上げられてきた〈貴族院議員Aと小僧仙吉の心理の対比〉を解説するうえでも〈同時代的視点〉の導入が不可欠であることを論証するために、以下、第4章の検証を中心に行いたい。

以下は第4章からの抜粋である。

Aは其時小僧の話をした。そして、
「何だか可哀想だった。どうかしてやりたいやうな気がしたよ。」と云つた。
「御馳走してやればいいのに。幾らでも、食へるだけ食はしてやると云つたら嚙（さぞ）喜んだらう」
「小僧は喜んだらうが、此方（こっち）は冷汗ものだ」
「冷汗？ つまり勇気がないんだ」
「勇気かどうか知らないが、兎も角さう云ふ勇気は一寸出せない。直ぐ一緒に出て他所で御馳走するなら、まだやれるかも知れないが」
「まあ、それはそんなものだ」とBも賛成した。

多くの指導書が問題提起しているのは、小僧にとってはよいことであるはずの「御馳走」をしてやるのに、なぜAは「冷汗」をかかなければならないほどその行為に勇気を必要とするのかといった問いである。一例を挙げると、大日本図書刊行の『中学校国語3年』（1961年検定通過）の指導書には、次のように解説されている。

人前で善事を行なうことのむずかしさは共通の心理ではあるが、「冷汗もの」といい「勇気がないんだ」に、Aの心境、性格をみることができる。

通常の授業では、Aがもともとシャイで物事に逡巡する性格だったという理解を教員が誘導しながら、〈善事を行うことの難しさ〉について生徒に考えさせて意見を言わせる、といった指導が行われることが多い場面であるが、本論ではこのような道德教材的な解釈に終わらない、「小僧の神様」の同時代的な読みの可能性を以下に提示してみたい。

まずは、「小僧の神様」が執筆された1919（大正8）年の「神田」という地域について検証していこう。前述したように、本作の舞台は神田であり、神田は皇居や貴族の屋敷町のある麹町区と、東京砲兵工廠のある小石川町に挟まれた区域だった。当時の小石川一帯は、砲兵工廠の下層労働者たちが群居する、世間一般に比して劣悪な問題を抱える地域と認識されていた。砲兵工廠の門は三崎町にあったが、門の先には一般人は立ち入れず、夜になると閉門されてしまう。しかも多くの工場労働者は電車賃を持たなかったので、明治以来、彼らの徒歩圏内である神田区内に多くの救済機関が建てられた。たとえば1897（明治30）年、片山潜が創設した日本で最初のセツルメントであるキングスレー館が三崎町3丁目に建設されたし、1908（明治41）年には救世軍と呼ばれるキリスト教団体が三崎町2丁目に大学植民館を建設した。当館では宗教講演や貧民医療、無料代筆、身の上相談などが行われたが、救世軍は1919（大正8）年にも神田区一ツ橋に救世軍大本営という豪華な施設も建設している。

そして、1894（明治27）年には東京YMCAが東京基督教青年会館（通称、神田青年会館）を小石川から徒歩圏内の神田区美土代町3丁目に建設したが、ここでは明治から大正期にかけて、労働運動、宗教運動の演説会が多く行われた。日本で最初の労働組合である労働組合期成会（1897年設立）の結成式が行われたのも神田青年館だったが、このとき一大勢力となったのが東京砲兵工廠の労働者たちだった。さらに、1919（大正8）年8月、東京砲兵工廠小石川労働会が発足し、8月23日から賃上げを要求して大規模なストライキに突入するという事態が勃発した。しかも、結果は労働者側の勝利に終わり、政府は慌てて大幅な賃金引上げを行った⁹。

それ以前の東京砲兵工廠は「帝国の模範工場」とも言われていたが、1918（大正7）年7月から9月にかけて起こった米騒動を契機として神田周辺ではデモクラシー意識に一気に火がつき、続いて起こった普選運動では神田青年館が会場として多く使用された。そこへ今度は小石川の労働者たちが大規模な賃上げ要求ストライキが起こったのである。それだけでなく1917（大正6）年に隣国ロシアで起こった革命が、皇族や貴族たちに精神的な打撃を与えなかったはずはなかった。

このようなデモクラシー意識の高揚を受けて、1919（大正8）年には〈貴族〉に対する民衆の積年の憎悪が表出するような事件が頻発した。11月8日、憲政会総裁だった加藤高明子爵邸に「加藤高明氏は日本の改造に対して誠意なきものと認め氏の政界引退を警告す」と主張する青年改造連盟100余名が連盟旗を立てて押しかけたり¹⁰、12月4日には小石川にあった拓殖大学の学生500名が「母校の改革」を叫び校旗を立てて、当時学長だった麻布の後藤新平男爵邸に押しかけたり¹¹といった事態が相次いだ。

そうした時代の不穏な空気の中で、皇室もまた変化を迫られた。1918年の米騒動を契機として、皇室は社会改造を目的とする労働運動や宗教運動に一定の理解を示し、歩み寄りの姿勢を見せるようになった。たとえば、救世軍に対して両陛下が1918年度より10年間、毎年1000円を下賜するという約束をしたというニュースを「朝日新聞」

（1918年12月29日）が伝えている。また翌1919年12月5日の「朝日新聞」は「悪臭も御厭ひなく作業場を御巡覧、職工の食物に就て特に御下問あらせらる」といったセンセーショナル見出しで、前日4日、皇后が男女1000人の職工が働く千住の製絨所へ行啓したことを伝えている。あるいは、同年12月21日「朝日新聞」によれば、各宮殿下が霞ヶ関離宮に学者を聘して、現代思想問題（自由平等、婦人・労働問題、社会問題など）を聴講したという。講義を行った一人である桑木博士によれば、「現今思想上の問題として一般社会の注意を惹いて居る労働問題及婦人問題等の中心に存する人格の尊重、社会改造の二つの思想に関連してデモクラシーの意義と社会運動の諸相」について説いたという。

しかも、1919（大正8）年の年末には貴族邸の不審火による火災が相次いだ。12月18日には新築落成したばかりの久邇宮邸が、続いて翌12月19日には蜂須賀侯爵邸が焼失した。後者に対して「朝日新聞」（1919年12月20日）は「累代の家宝合せて損害八十万円」、「焦土に散る能衣装、見舞の名士皆惘然」、「放火の疑ひある発火原因」などと報道している。さらに12月27日、華族会館の裏手にあった帝国ホテルの新館が全焼した¹²。こうした一連の不穏な事件は、貴族の側からすれば、大衆の彼らに対する憎悪の表出、革命の予兆のように受け取られ、彼らを震え上がらせたに違いない。

では、以上のことを念頭に置いて、「小僧の神様」第4章について再考してみたい。

そもそも貴族院議員AとBとの屋台鮎体験には、根本的な違いがあったと推測される。もともと屋台鮎は高級鮎店に比べて値段が安く客層も大衆的だっただろうが、一方で江戸名物としての鮎人気は高く、食通のあいだでは値段にかかわらず屋台鮎を重んじる風潮が当時もあった。そのため屋台鮎を取り巻く光景は、その時々によって印象が大きく異なっただろうと想像される。前掲『すし通』に描かれたような「江戸前の鮎屋と江戸児の客」とのあいだで「金銭以外の意気の取引」が遣り取りされるときもあれば、通りすがりの職工や雑業層が腹ごなしに数個つまんで立ち去るような味気ない光景のときもあっただろう。少

なくともBが入店した折の京橋の屋台鮎は、彼の「江戸趣味」を多少は満足させるような雰囲気だったようだ。

とはいえ、仮にBがそこに〈江戸〉的光景のみを見て取り帰ってきたとすれば、それはいささか暢気にすぎると言わざるを得ない。大正8年には、前述したような社会改造熱の高揚とともに、「華族打破」を唱える声も高まっていた。そうした不穏な空気の中、華族の中にはすすんで社会改造に着手する姿勢を示す者も現れ「革新華族」などと当時呼ばれた。たとえば1919（大正8）年12月7日の「読売新聞」では、当時45歳だった正親町男爵が同年春に大木伯爵らとともに「全国特殊部落の代表者」を「華族会館に集めて盛んに御馳走をして『華族も平民も同じ特殊部落の人間だ、同じ所で喜びを分つに不思議はない』と気焰を上げた」と伝えられている。

そのほかにも、たとえば志賀の学習院時代の級友だった有馬頼寧（伯爵嗣子）も「革新華族」の名で呼ばれた一人だった。1919年9月1日「読売新聞」によれば、有馬をはじめとする青年華族が、「貧児に中等以上の教育を授く可く労働中学校建設の申請をし」たとされ、「昼の間は労働をして夜二三時間夜学をすると云ふ特志な生徒を歓迎」するとある。同じく同年10月27日「読売新聞」によれば、有馬とその妻が「小さき労働者の子を迎へ」入れて共に遊び御馳走をふるまったという。しかし、そうした華族自身による革新運動に対しては、大衆の自身らへの憎悪の目をそらすためのカモフラージュにすぎないという批判も当時多くあったという。

「小僧の神様」を読むかぎり、貴族院議員AとBが〈革新華族〉であったようには思われない。しかし、そのAとBのあいだにも世相に対する感度の点で明らかな差があったと考えられる。少なくともAは京橋の屋台鮎で江戸の光景とは異なる都市大衆の一面を見て取ったに違いない。それに対して、Bは同じ屋台鮎に江戸の名残のみを見て満足して帰ってきた。階級観念の盤石とした古きよき江戸においては、お忍びの殿様が空腹の小僧に情けをかけたとしても、江戸庶民は喝采を送りこすすれ、冷ややかな視線を浴びせることはない

だろう。そうした信頼感がBの発言の暢気さにつながっていたと思われる。たしかに、そうした江戸的な暢気さは、当時の神田にはまだ多く残っていただろう。小僧に身分を明かさずに鮎をおごったAを、鮎屋のかみさんは「粋な人なんだ」と江戸庶民の価値観で評価している。

他方、Aが「小僧は喜んだらうが」と見て取ったとおり、食べ盛りに十分な食事も与えられずに朝から晩までこき使われているのだろう小僧には、少なくとも現時点ではまだ階級格差に対する不満の兆しは生じていない。しかし、たとえば関川夏央が小僧の奉公している秤屋の位置を「だいたい神田錦町か美土代町あたり」（『文学界』1998年5月）と推測しているように、小僧の秤屋があったであろう地域は明治・大正期の労働運動・宗教運動の拠点ともなった神田青年館の付近であり、その意味からも、小僧は当人の好むと好まざるとにかかわらず、数年のうちに思想的覚醒を迎えることが運命づけられているような存在だと言えなくもない。

たとえば、1つ6銭の鮎代が払えずに店を追い払われた、といったような、一つ一つは日々に紛れて忘却されてしまうような屈辱や不満の累積が、米騒動や普選運動のような何かしらのきっかけを得て集団化することにより、暖簾のうちの〈江戸庶民〉が、突如大正デモクラシー下の〈都市の群衆〉へと一変してしまう——。そうした緊張感を孕むものとしてAの発言や彼の「冷汗」「勇氣」の意味を考えるのでなければ、せつかくの〈貴族院議員Aと小僧仙吉の心理の対比〉も作者の意を汲むものとはならないだろう。

以上、本論では、戦後の中学校国語教科書の教材として長く使用されてきた志賀直哉「小僧の神様」を取り上げ、その難解さを再認識するためにここまで論じてきた。もとよりほとんどの文学作品は、教育目的に使用されることを想定して書かれているわけではない。しかし、特に小中学校の国語教材は、いまだ読書習慣を持たない児童・生徒たちに文学の魅力を存分に伝えなければならないという使命を強く帯びている。したがって、教員側が試験問題を作成しやすい評論文よりも、「古典的名作」をできるかぎり多く採用したいと

というのが編纂者たちの総意であろう。教えにくいといった理由で「古典的名作」の多くが国語教科書から消えてしまった今日、戦後に定番教材として使用されてきた作品の価値を、今一度再検討する取り組みが必要となってくるのではないだろうか。

注

- 1 表1、2は国立教育研究所附属教育図書館・教科書研究センター共編『中学校国語教科書内容索引 昭和24～61年度』（教科書研究センター、1986年）を参照し作成した。
- 2 テクスト論とは1950年代アメリカを中心に確立された「新批評」（ニュークリティシズム）を起源とする文学のこと。この価値認識の下では、「作品」は「作者」から切り離され、一つの閉じた世界としてのテキストの「精読」が称揚され、作者の意図の追求である「解釈」は作品が誕生した時代背景の考察とともに文学研究から排除された。この手法はとりわけ学校教育の場で、教える側にとって都合だったこともあり広く浸透した。
- 3 海野弘『東京の盛り場—江戸からモダン都市へ』六興出版、1991年、46頁。
- 4 小田部雄次『華族—近代日本貴族の虚像と実像』中央公論新社、2006年、45頁。
- 5 学習院百年史編纂委員会編『学習院百年史 第一編』学習院、1981年。
- 6 「読売新聞」1907年3月28日、朝刊1頁。
- 7 「東京朝日新聞」1919年11月20日、朝刊2頁。
- 8 山口直孝「『小僧の神様』論——Aと仙吉との関係をめぐって」、『日本文芸研究』第47巻2号、1995年9月。
- 9 「読売新聞」1919年8月30日、朝刊5頁、同8月31日、朝刊5頁。
- 10 「朝日新聞」1919年11月8日、朝刊5頁。
- 11 「朝日新聞」1919年11月8日、朝刊5頁。
- 12 「朝日新聞」1919年11月8日、朝刊5頁。